

侍従大納言、駿者の改請を止むること

侍従大納言成通卿、そのかみ九歳にて、瘡病みし給ひけり。年ごろ祈りける某僧都とかやいふ人を呼びて祈らせけれど、かひなくおこりければ、父の民部卿ことに嘆き給ひて、傍らに添ひゐて見扱ひ給ふ間に、母君と言ひ合はせつつ、「さりとて、いかがはせむ。このたびは異僧をこそ呼ばめ。いづれかよかるべき。」などのたまひけるを、この児臥しながら聞きて、民部卿に聞こえ給ふ。「なほこのたびは僧都を呼び給へかしと思ふなり。そのゆゑは、乳母などの申すを聞けば、まだ腹の内なりける時より、この人を祈りの師と頼みて、生まれて今九つになるまでことゆゑなくて侍るは、ひとへにかの人の徳なり。それに今日この病によりて口惜しく思はんことの、いと不便に侍るなり。もし異僧を呼び給ひたらば、たとひ落ちたりとも、なほ本意にあらず。いはんや、必ず落ちんこともかたし。さりともこれにて死ぬるほどのことは、よも侍らじ。我を思さば、いくたびもなほこの人を呼び給へ。つひにはさりとも止みなん。」と、苦しげなるをためらひつつ聞こえ給ふに、民部卿も母上も、涙を流しつつあはれに思ひよせたり。「幼き思ひばかりには劣りてげり。」とて、またのあたり日、僧都を呼びて、ありのままにこの次第を語り給ふ。「隠し奉るべきことに侍らず。御事をおろかに思ふにはあらねども、かれが悩み煩ひ侍る気色を見るに、心もほれて、思されむことも知らず、しかしかのことをおろかに申すを知りて、この幼き者のかく申し侍るなり。」と、涙を押し拭ひつつ語り給ふに、僧都おろかに思されむやは。その日、ことに信をいたしき。泣く泣く祈り給ひければ、際やかに落ち給ひにけり。

この君は、幼くよりかかる心をもち給ひて、君に仕うまつり、人に交はるにつけても、ことに触れつつ情け深く、優なる名をとめ給へるなり。すべていみじきすき人にて、世の濁りに心をそめず、妹背の間に愛執浅き人なりければ、後世も罪浅くこそ見えけれ。

【口語訳】

侍従大納言成通卿は、その昔九歳で、熱病にかかりなされた。長年祈禱していた某僧都とかいう人を呼んで祈らせたが、効果がなく熱が高くなったので、父である民部卿はとりわけ嘆きなされて、そばに寄り添い座って看病なさるときに、母君と繰り返し相談して、「そうかといって、どのようにしようか。今度は今までは別の僧を呼ぼう。どの僧がいいだろうか。」などとおっしゃったのを、この幼子は病床に寝たまま聞いて、民部卿に申し上げなされる。「やはり今回は（いつもの）僧都をお呼びになつてくださいなと思うのです。その理由は、乳母などが申すのを聞くと、まだ私がお腹の中にいた時から、この僧都を祈禱の師と頼みに思って、生まれて今九歳になるまで差し障りなくおりますのは、ひたすらにその人の徳のおかげである。それなのに今日この病気が原因で僧都のことを取るに足りないと思うようなことが、たいそう気の毒でございます。もし別の僧を呼びなされたならば、たとえ病気が治ったとしても、やはり私の望むところではない。ましてや、必ず治るようなことも難しい。いくらなんでもこの病気で死ぬほどのことは、まさかございませぬ。私のことを大切に思いなされるのならば、何度でもやはりこの僧都をお呼びください。最後にはいくらなんでもきつと治るでしょう。」と、苦しげな様子をしずめしずめして申し上げなされるので、民部卿も母上も、涙を流し流しして同じ気持ちで感動したのであった。「幼いこの子の考え方には劣っていたなあ。」とあって、次の祈禱の当日に、僧都を呼んで、ありのままにこの成り行きを語りなされる。「隠し申し上げなければならぬことではございませぬ。あなた様をおろそかに思うのではないのだが、あの子が病気で苦しんでおります様子を見ると、心もぼうつとして、あなたがどのように思いなされるかも考えず、これこれのことをこつそりと申し上げるのに気づいて、この幼い者が（私たちに）このように申し上げるのです。」と、涙を押し拭い押し拭いして語りなされると、僧都はおろそかに思いなされるだろうか、いや、思うはずがない。その日は、特に心をこめて祈禱をした。泣きながら祈りなされたところ、見事に病が治りなされた。

この君は、幼い時からこのような心を持ちなされて、帝にお仕え申し上げ、人と交際するにつけても、何ごとに関しても情けが深く、優雅な評判を残しなされているのだ。総じてたいそうな風流人であつて、俗世の濁りに心を染めず、男女の関係において愛執が浅い人だったので、来世もきつと罪が浅いと思われた。